

19世紀後半のアメリカの女性文学にみる女性の仕事観

自己実現のための仕事と家庭

The perspective on the work of women in American women's literature in the late nineteenth
Work for the self-realization and family

杉山 真弓

Mayumi Sugiyama

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化専攻 博士後期課程

キーワード：仕事，自己実現，女性

Key words : Work, Self-realization, Women

1. 研究目的

本研究の目的は文学にみられるアメリカの中産階級の女性の仕事観を追求することである。研究対象作品は19世紀後半のアメリカの女性作家による文学作品とする。本研究が明らかにすべき問題点は次の3点である。

1. 19世紀後半のアメリカの中産階級の女性の仕事観。仕事に単なる経済的手段以外の意味を見出していたかどうかを「仕事(work)」と「労働(labor)」をキーワードにして考察する。
2. 上記の時代の仕事観を形成していた社会的・一般的な通念，とりわけ家庭について。仕事と家庭の両立がどう描かれていたか，家事労働は仕事と見なすことができるのか否かを中心に考察する。
3. 「工場労働者」に対する中産階級の女性の意識について。中産階級の女性は工場労働者，工場労働というものに価値を見出していたのかを考察する。

問題点の1番目は，19世紀後半のアメリカの中産階級の女性が仕事に対して単なる経済的目的だけでなく，生きがいや自己の存在の肯定感といったものを追求していたということを具体的な作品を読み解くことによって証明していく。2番目は，19世紀後半のアメリカの女性の仕事観，および家庭観を形成していた概念を，ジェンダー論やフェミニズム理論に基づいて考察していく。3番目は，中産階級の女性が「工場労働者」をどのようにとらえていたかを，資本家側と労働者側の両面から追求していく。

予想される結果として，「19世紀後半のアメリカ

の女性文学には，女性が仕事をアイデンティティの確立や自己実現の手段としてとらえるという意識が読み取れる」という仮説を立てている。この仮説を立証して，従来のアメリカ文学研究に新たな一石を投じることが，本研究の意義であると考える。

2. 研究実施内容

本年度は Elizabeth Stuart Phelps (1844-1911) の作品を中心に研究を進めた。特に，工場労働に従事する女性と，資本家側の女性を取り上げた彼女の作品，*The Silent Partner* (1871) を精読し，中産階級の女性と労働者階級の女性，それぞれの仕事に対する意識を考察した。そして，本作品では中産階級の女性が仕事を自己実現の手段と見なしているのに対し，労働者階級の女性にはその意識が見られないように書かれていることを追求した。前年度の研究対象だった Louisa May Alcott の *Work: A Story of Experience* (1873) との比較も行なった。さらに Elizabeth Stuart Phelps のやはり仕事をする女性を描いた *Doctor Zay* (1888) を研究し，専門職に従事する女性の仕事観についても考察した。

さらに，指導教官とともに精読した，女性と仕事についての研究書 *Working Women, Literary Ladies: The Industrial Revolution and Female Aspiration* (2008) をはじめ，仕事と女性に関するさまざまな論文の読み込みを行なった。その結果，労働者階級から身を起こして出世した女性が，自身の工場労働者時代の経験談をもとにして執筆した小説など，新たに精読すべき書や論文を知るこ

とができた。

本年の1月にはニューヨークで行われた MLA (Modern Language Association) の学会に出席した。これは年に一度、アメリカ国内で行われる大規模な学会であるが、アメリカをはじめ、世界中から集まってきた研究者たちの研究発表を聴くことができたのは非常に貴重な機会であった。本研究がアメリカ国内でどのように位置づけられるかを知るうえでも参考になった。また、自分の研究以外の分野の研究発表を知ることによって、より広い視野でアメリカ文学というものを見られたことは研究者としてまたとない有益な経験であった。

また、日本国内でも日本アメリカ文学会の年次総会や日本マーク・トウェイン協会の年次総会といった場で、本研究に関連する他研究者の研究発表を聴講したり、研究に関する意見交換をしたりしたことによって、自身の研究を多角的な視点から見ることができた。

3. まとめと今後の課題

本年度は修士時代から研究を進めている作家である、Marietta Holley の *My Opinions and Betsey Bobbet* (1873) に関する英語論文が『大妻レビュー』に掲載された。この論文では女性の権利、とりわけ参政権に関する Holley の主張とユーモアとの関連性について論じた。今後は彼女が女性の職

業についてどのように述べているか、また、家庭と仕事との関係についてどのように語っているかといった、より仕事観に的を絞った研究を進め、論文にしていく必要がある。

また、今年度に行なった研究発表を踏まえて、Elizabeth Stuart Phelps の *The Silent Partner* についての論文執筆を行ないたい。

今後は個々に行なってきた作家・作品研究をより広い視野からより深く研究し、全体の構成を考察する。さらにジェンダー論などの理論面からの研究も深め、関連する文献の読み込みも行なう。論文発表や学会発表といった研究成果をもとにして博士論文の執筆に取り掛かる予定である。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

[1]杉山眞弓, A Woman Called the “Female Mark Twain”: The Nature of Marietta Holley’s Humor, 大妻レビュー, 査読なし, 50号, 2017年, 129-138.

②学会発表

[1]杉山眞弓, 仕事で「自己実現」を目指す女性——Elizabeth Stuart Phelps の *The Silent Partner* を中心として, 大妻女子大学院生研究発表会, 2018年1月27日, 東京都・千代田区.